



TITLE:

# 社会科学における人間像

AUTHOR(S):

出口, 勇蔵

---

CITATION:

出口, 勇蔵. 社会科学における人間像. 経済論叢 1961, 88(4): 223-244

ISSUE DATE:

1961-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132849>

RIGHT:

# 經濟論叢

第八十八卷 第四號

---

社会科学における人間像……………出口 勇 蔵 1

明治前期の「国立銀行」

における減価償却……………高 寺 貞 男 23

日本貿易論における方法論

反省のための一視角……………杉 本 昭 七 43

世界恐慌論における二類型（下）……重 田 澄 男 58

---

昭和三十六年十月

京都大學經濟學會

# 社会科学における人間像

出口 勇 蔵

本稿は去る五月二十八日に催された京都大学経済学会の公開講演会で語ったことをしたためたものである。公開講演の性質上、詳細に展開することはできなかったが、本稿においては、その欠陥はある程度には修正されている。

## 内 容 目 次

- 一 問題の提出——吉川英治氏の疑惑と不信とについて
- 二 解答への準備
- 三 社会科学における人間像
- 四 社会科学と集団
- 五 結 語

## 一 問題の提出——吉川英治氏の疑惑と不信とについて

今年は親鸞上人の生誕七〇〇年に当たるといので、京都の春は異常のにぎわいを呈した。その記念のために、「アサヒグラフ」紙は臨時増刊を発行したが、そこに吉川英治氏は『親鸞寸抄』という短文を寄せている。その文

の中でわれわれは次のように読むのである。

「……人間の智慧と意志の指先が、月の肌までとどきた科学の現代でも、逆に、人間のうちにある真如の肌はいよいよ遠去かりゆくばかりな心地がしてならない。文学はじめ社会科学などのすべても、人間を知ろうとしてかえって人間をズタズタにしている相が現代だと思ふのは、ひとり私だけのひがみだろうか。」（一九五九年十一月、アサヒグラフ臨時増刊、親鸞上人七百年記念号、六—七ページ）

このことばの中に盛られているのは、社会科学では——文学のことはここでの問題ではないから省みないとして——人間の全体性がみうしなわれているのではあるまいかという疑惑と、それにもとづいて起こる、社会科学への不信感である。吉川氏にこの種の疑惑をおこさせ、社会科学にたいする不信の念を懐かせるようになるのはそもそも何か、という問にも答えねばなるまいが、またこの疑惑はたして正当なものであるかという点を吟味することは、社会科学の立場としては、大へん大切なことでもある。発言者、吉川英治氏が日本のきわめて広い層の読者をもつ文学者であり、読者の生活意識を汲みとることとても上手な人であって、その人の思想的影響力によって現代の日本人の常識が養われ、固められていると考えられるだけに、この検討を行なう上での疑惑を解き、それにもとづく社会科学への不信感を一掃することは、重要な仕事の一つであるといわなくてはならぬ。

ところで上の疑惑、すなわち社会科学が「人間を知ろうとしてかえって人間をズタズタにしている」のではあるまいかというたがいは、二つの側面をふくんでいるであろう。その第一は、社会科学がその研究の対象において、現実の人間生活をズタズタに切り、バラバラに分解してしまっているのではないかという疑惑である。社会生活はひとつの運動体であり、その中にさまざまな生活内容がたがいに脈絡をたもちながら綜合されているものであるのに、社会科学はそれをひとつの統一性として取り上げることではできないで、おのおのの構成要素をひとつずつ取り

出して、それらの中にある法則性や一般的傾向を明らかにしようとする。だから、たとえ、それらが達成されたところでも、社会生活の部分像が独立したがたで得られるにとどまって、構成諸要素の綜合体としての社会生活そのものの具体的なあり方はとらえられようがない。ことに、一九世紀のはじめに弘く行きわたった信念であった、「分化と進歩」とが同意語であるという立場からすると、社会生活がこまかく分解されて、それらの部分についてひとつの科学ができるようになればなるほど、社会科学は進歩したことになると考えられるのだから、上の疑惑はなおさら深まってくるといわなくてはならぬ。この疑惑は、社会科学の対象についていだかれるのだが、つぎに、社会学者すなわち社会科学の研究主体についても、同じような分解ないし分化が指摘することができ、その結果として生まれる、主体のとめどのない分裂にたいする疑惑があげられるであらう。社会科学の各部門の研究者が職業的に独立すると、経済や法や道德の専門家はそれぞれ分化して専門の知識の中に閉じこもり、素人ばなれにした議論を互のあいだでとり交わすことによつて、科学研究者としても統一的な人格の所有者とはいえない、ひずんだ人格になってしまい、こんな専門家から、社会問題にたいする、バランスのとれた対策や処置は期待されようがない、という状態になるであらう。

わが国の大衆の文学的な関心をつなぎとめることに巧みな作家、吉川氏の疑惑は、この二面からなっているといつてよく、したがって、わが国の大衆もまた、上の二面の疑惑をいだき、社会科学にたいして、不信任をいだいているものと解してよからうと思う。しかもこの疑惑がある程度に尤もであり、社会科学への不信は知識階級においても相当に根づよいものとも思えるから、この疑惑を解き、社会科学への信頼を確立することは、われわれの義務の一つであるであらう。社会科学における人間についての諸問題のうち、この点のみが本稿で取りあげられる。

## 二 解答への準備

この問題のこたえ方にはいろいろの仕方がある。そしてそのひとつが社会科学のこととなった立場から下されるのだ。だから、わたくしの答えを提示するためには、まず自分の立場を多少なりとも明らかにしておかなければならない。答えを提示するために、さかのぼって立場をしめし、原理的な説明からとりかからねばならないということは、それ自体、社会科学の科学論の情況をしめしているのであって、現代の社会科学の未熟さを暴露しているに他ならないが、また同時に、将来にひらける展望をも予約しているともいえよう。

わたくしは科学を、自然科学と人文科学と社会科学との三部門に分けて考える。あるいはまず自然科学と人事科学との二つがあつて、その人事科学の中に、人文科学と社会科学との二大部門があると、考えてもよい。

さて、すべて分けられるもの二つのには、同一性と差別性との二つの契機がふくまれており、その二つを綜合することによって分けられるべき根拠や二つのものの関係などが明らかにになる。いま、問題を科学一般の中から自然科学と人事科学との同一性と差別性という点にまでさかのぼってしめすことは、ここでは行なわれない。人事科学の中で人文科学と社会科学との区別と関係が明らかになる根拠から説くことによって、問題を解くための準備を始めよう。

人文科学と社会科学との同一性は、科学の対象をつくり上げた者と科学研究の主体とが同一の人間であるという点にある。すなわち、物をつくったり、感性的実践に身を投ずることによって、社会生活をいとなむところの人間が、それらの科学の認識にたずさわっており、またその認識にもとづいて、社会生活をあたらしく建設しようと、

努力しているのである。人間における認識と実践との複雑な関係が、対象と主体との双方にみられ、また対象と主体との関係の中で再生産されていること、つまり、対象と主体との両側に同じ人間が立っているということのうちに、二つの科学の同一性の根拠がある。この意味で両方とも人間くさい科学であって、これが二つの科学の特色をつくり出している。社会科学の方法論を説いてきたひとが、この科学における主観性、というとき、まずはこの人間くささに読者の注意をうながしているのである。<sup>1)</sup>そしてこの臭みのゆえに、両方の科学を一括して扱うときには、人事科学の語をえらぶことができない。<sup>2)</sup>

人文科学と社会科学とを分ける根拠は、人間のあり方と働き方における差別にある。そしてその差別は大まかにいうとつぎの点に成り立つ。

第一に、人間の社会におけるあり方として個人と集団の二種をかぞえることができる。ここに集団というのは、小にしては家族、同郷団体、職業団体、身分、階級、大にしては民族、人種などといわれるものを一括するが、その種類と集団としての特質の実現の程度とはまちまちというわけではない。またこの二種のものはある意味では超歴史的であるが、その内容の充実性からいうならば、きわめて歴史的なものである。

第二に、人間の働き方についていうと、それは、正常な場合には、意識的に目的を追求するところにあるから、追求される目的の種類によって、行為の分類ができることになるだろう。行為の目的はいろいろに分類できようけれど、一つの仕方は、目的そのものが物質的なものであるか精神的なものであるかによって大まかな類別をしようとする方法である。目的そのものとことわるのは、すべて行為の目的は純粹に精神的なものだけであることは非常にまれであって、精神的なものを目的とするばあいにも、つねにその実現の手段として、何らかの物質が追求される

ものなのであるが、手段として求められる物質的なものは、物質的なものそれ自体を目的とするばあいの物質とはちがうのであるから、ここでの分類の基準と考えられてはならないのであって、分類の基準はあくまで目的そのものについて行われるべきだからである。行為によって実現される目的と考えられるものを価値と名づけるならば、価値には、純粹に物質的な価値からはじまって、物質的な価値と精神的な価値とが入り交っているものを経て、純粹に精神的な価値にまでおよぶ、一連の価値のスケールが考えられる。健康価値、経済価値、法価値、道徳価値、芸術価値、学術価値、宗教価値などがこのスケールの中に位置するであらう。

ところで社会生活は、上の二つの点——人間のあり方と働らき方——が結びついたところに現われる。そしてこの結びつきの仕方によって社会生活の種々の相が浮かび上がってくるのである。そうしてこれらのいろんな社会生活の相の中で、二つの大別してよいものがあるだろう。この大別の基準は行為の目的としての価値による。すなわち、人間は制作的活動によって価値になった物をつくるが、その価値物の中には、自然のおよび社会的な原因にもとづいて、数量と持続性において制限を強く受けているようなものであるばあいと、それとは反対に、かような制限を受けることの少ないばあいとがある。例をあげよう。健康価値はひとりびとりの人間の身体に宿り、原則としては他の身体に譲渡できないという意味で絶対的な制限をもっている。<sup>3)</sup> 経済価値はその生産において、原料と技術と労働力の関係から数量的な制限をもっており、逆にその数量がある程度以上に多いときにはかえってその評価をおとすという事情があるほかに、その価値の実現はそれ自体の滅却であるという本質のために、本来制限をもっている。名誉という社会的価値は名誉をやとす地位が制限されていることのために制限されている。<sup>4)</sup> これらの価値にはそれぞれの制限を越えようとする努力がともない、その努力がまたしても固有の制限に出あうという、繰



り返しが見られるのであり、その繰り返しの中から残ってゆく余剰こそ、人間の社会生活の向上にほかならぬ。すなわち、人間の健康の増進であり、富の蓄積であり、名譽から生ずる自尊と他人の人格の尊重との向上である。この種の価値をわれわれは身体的価値と物的価値と社会的価値の三種とすることができるであろう。

このような価値にたいして、本来の精神的な価値物には——それが実現するための物質的条件のために制限を受けることはあっても——制限というものを知らない。芸術や学術上の作品はそれぞれの質において固有の価値をもっており、その数が多いからといって価値が低く評価されるということなく、多々ますます弁ずという次第であり、またその価値はいつまでも変わることなく維持されるものである。<sup>5)</sup> この種の価値を精神的価値とすることに読者の異存はないであろう。

以上のように、生活目的とされる価値には二種類の区別すべきものがあり、身体的価値・物的価値および社会的価値がひとつの部類に入り、各種の精神的価値は他の部類に入れられる。そしてこの部数わけに従って、われわれの社会生活は二つに大別されるであろう。一つは狭義の社会生活であり、他は文化生活である。社会科学と人文科学との差異が生まれるのはあたかもこの対象における差異からである。

さて、生活目的から考えられる上の差異のほかに、第二の差異点が指摘できるだろう。それは行動の主体の構造にかかわりをもつ。社会的な人間は、——前に一言したように——行動の主体として、ただ単一の構造をもっているわけではなく重層的な構造をもっているといえる。すなわち人間は、個人としてと同様に、家族や組合や階級や民族として——一般には集団として、行動することができるのである。ここでは集団のあり方や種類には立ち入らず、それを一括して論じることにするが、人間のこの二様のあり方と活動の仕方がまた、二つの科学の対象と深いつな

がりをもっているのだ。われわれは、狹義の社会生活においては、人間は個人としてよりも集団として活動することが多く、文化生活においては、逆に、個人としての活動がより重要である、という事実を見いだす。つまり上述の、身体的価値、物的価値、および社会的価値を実現・追求する生活においては、人間は個人としてよりも集団としての方が大きな役割を演じるものであり、文化価値を求めて働くらばあいには、個人としての活動の意義が一層大切なのである。健康は個人のものであるにしろ、その人の身体は民族的な体質や体格、地方的な特徴、家族の遺伝などにヨリ大きく制約されているであろう。物的価値すなわち経済価値をめぐっての生活について考えると、富の生産においても消費においても、個人がそれにあずからなくてはそれぞれの実現せぬことはいうまでもないが、問題はその時の個人の資格であつて、個人としての個人の資格でかれは生産や消費に関係するのではなくて、生産のばあいには、ある生産現場の労働者群の一員として生産手段や原料に立ちむかい、消費のばあいには、あるいは同じ労働者群が構成する生活協同組合の一員として、あるいはかれを戸主とする家族の一員として、完成財を購入し自分の用に供しているのである。これに反して、文化価値を生産し享受する生活においてはそうではない。ひと は個性的な人格をもつ個人として文化財たとえば芸術品を制作し、享受しているのであつて、かれの家族の一員として、かれの属する階級のメンバーとして、そうしているのではない。<sup>6)</sup>

人文科学と社会科学との対象界における差異点は、上の二点に絞られるといつてよい。そして先きのべた同一性とこの差異性とを統一的に考えると、これら二つの科学の対象がともに明らかになるだろう。

註(1) マックス・ウェーバーが社会科学の認識は主観的前提に結びついているといったことは有名だがこの注意は、もっとも深くは、ここにのべた事態に由来する。ウェーバーに似た同じ考えを現代的に展開しているフォン・ハイエクも、社会科学の

主観性ということを強調する。(F. v. Hayek: The Counter Revolution of Science, 1952, p. 22 ff.) しかしこういって、われわれがこれら二人の考えに同調しようとするものではない。ハイエクに至っては、大へん明らかに、「『社会的事実』が主観によって考えられているという契機をはなれては存在しない」ということによつて、社会的事実の客観性を正当に取りあつかおうとしていない。これは重大な欠陥である。ハイエクの方法論については、稿を改めて論じる機会をもつてあらう。

(2) この言葉について一言。自然科学に対する科学を人事科学といえは、ひとつは、医学はどちらに入るのだと反問するだらう。これにたいしては、二つのことを答える。一つは、医学は人体の科学であつて人事の科学ではない、身体が存在と機能との科学であつて、人間の社会的・文化的な実践とその成果との科学ではないということ。二つは自然科学と人事科学とに大別するといつても、すべての科学がキッパリと二つに分かれるはずだと考える方が無理であつて、限界のところでは両方にまたがっている対象があつてよいわけである。自然科学としての医学の中にも、社会医学として社会科学の中に入れられるような問題もあるわけだし、社会科学としての政治学の中にも、民族の理論は、自然科学の援用なしには、展開できるものではない。一般に身体の問題は、二つに大別される科学の両方の部門にまたがっている。それは身体が自然と人事とが連絡し合う結び目であるからである。

(3) 医学が進歩すると、他人の身体の一部——たとえば眼珠や皮膚や骨や内臓器官など——を移植することによつて、健康をとり戻すこともできよう。現に弘く行われている輸血もこのたぐいのものである。これらは個体の制限をつき破ろうとするものである。しかしこの種の制限突破は、身体という制限それ自体——生命——を越えることはできない。また身体の一部を商品化することは社会的な問題をかもし出す。

(4) 経済価値については詳しくのべない。名誉について一言すると、たとえば、競技において一等や優勝はただ一つしかない。この制限を破るために、二つの方法がある。ひとつは同じ競技において賞すべきものの数をふやす方法である。殊勲賞、敢闘賞、技能賞、残念賞などがそのために考え出される。二つには、同種の競技の数をふやすことである。全国的な競技のほかに、地方的な競技や職域的な競技など、さまざまな競技がふえてくる。人口の増加は、これらの方法による名誉の制限の突破に拍車をかける。かようにして、名誉は本質的に制限をとまないつも、社会的に普及し、人の名誉心をみたすことによつて、自尊自重の念を増すであらう。しかし他方において、たとえば官庁機構の巨大化のような結果も生まれるこ

とに注意せねばならない。

- (5) 文化財についてもその豊穡さがかえって評価をひくめるということがあるとすれば、そのときは固有の文化価値として評価せられているのではなくて、むしろ社会的価値をもったものとしてみられているのである。ある時代の芸術家を一定数あげると言うようなばあいには、芸術のまずしい時代にはさほどでもない作家の名があげられる反面、芸術に豊かな時代には一流の人であってもその選にもれることになるようなものである。あるいは評価する人の観賞眼が文化財の豊かさのために鈍磨して起ることもある。これは主観的な原因で起る現象であって、客観的な意義をもつものではない。わたしはルーヴル美術館をおとすれた人が「あんまり多いのでいやになった」というのを聞いたことがあるが、したしくそこを訪れることによって、わたしはこの慨嘆に同意したいと思った。しかし、「ルーヴルを一度にみてしまおうとする方が無理なのだ」とその人に忠告しなくてはならない。また美術品が若財の手段となったり名望欲の対象となったりすることは多いが、これは芸術品が社会的価値をもつものとして考えられる例である。文化価値から社会的価値へのこの変質は社会科学においてとり上げねばならぬ、重要な一つの問題である。というのは、この変質は価値の疎外であるからである。

- (6) 読者が洞察されるだろうが、わたしの考えは、デイルタイの思想の影響を受けながら出来たものであるが、デイルタイの思想にたいしては若干の批判をもっている。一言だけいっておくと、かれのばあいに、Kultursystem と *Andere Organisation* との由来のちがうこと——一方は目的、他方は原因——だけが強調される結果、この二つの「恒常的な事態」がすれちがいながら存在するもののように理解されてくる。だから現実の構造は二つのものすれちがいの局面において、見定められるわけであるが、すれちがいの場所が明白になっていないために、二つの事態がそれぞれ孤立して存在しもあるかのような誤解を生みやすい。一九世紀の歴史学派の立場が「文化体系」を論ずるときには「外的組織」の方を忘れて、文化主義の弊におちいり、外的組織を論ずると文化体系の独自性が軽視されて、国家主義の傾向をまねいたのは、ここから生まれるように思われる。わたしは、この点を顧みて、行動の目的から生じる行動の様式に則して文化体系と外的組織とを考へながら、主体の構造から両者の差異の由来を説こうとするのである。以前に拙編『経済学史』の序論において卑見をあらまし述べておいたが、今ではそれを、ここにかくように、改めている。

### 三 社会科学における人間像

わたしの出した問題のためには、社会生活における人間のあり方、働らき方として上に注意した第二の点を、いさ少しくわしく述べることが必要である。

さしあたつてまず注意をうながすことが必要であるのは、わたしが狭義の社会生活においては個人よりも集団が一層大きな役割をはたすといったからといって、社会生活における個人の存在と働らきとを不当に軽ろんじていることにはならないということである。このことは、文化生活において個人の意義を重視するからといって、集団のもつ意義を無視するわけではないのと同様である。経済価値についていえば、生産には個人ひとりびとりの労働があづかっているにはちがひなく、その個人の適応能力が問題とされてはならないのだが、生産現場においては個性的な人格なり特性などは問題とならず、その職場で労働力を対象化している、適性をそなえた、生産的労働者の集団の一員であることが重要なのである。また消費においても、その個人に固有な欲望の質と量とは消費市場においてはそのままの形では問題とはならず、たとえば等級わけされた質と格づけされた量との欲望の所有者であることが問われているのである。ある等級の質の欲求のある量にたいする欲望はその人個人だけに固有なものはなく、他の多くの人の欲望と等しいものであり、つまり集団としての需要の一構成要素にはかならない。このように、経済生活においては、個人に独特の労働力や欲望のあり方は否定されて、労働力集団および欲望集団を構成する一要素として、労働力や欲望はかえりみられるのである。けれども集団が集団として存在しうるのは、個性的な個人が、はっきりと自覚的なすがたにおいてではないが、予め存在していることが必要であつたのであるし、ま

た集団が集團として活動するということは、その構成要素である個性的個人の働らきを通して実現されることにはかならない。このような意味において、社会生活においては、人間の存在と活動とは第一的には集團として現われ、個人は第二次的、附随的な活動をするのである。

これを文化生活と比べるとき、対照はあきらかである。文化生活では事情は逆になって、その中に存在して活動するのは個性的人格としての個人であり、集團に属する人間としてのその人の働らきの意味は第二次的である。芸術家の生活と作品について少し考えを深めてゆけば、このことは明瞭になるであろう。<sup>1)</sup>

このようにいえば、ひとは疑問をもつてであろう。文化生活における個性的個人と狭義の社会生活における個人とは同じものであるのか、ちがった人格であるのか、と。この疑問は正当に出されている。そしてそれへの答えは、二つの個人はその性格を異にすると、いわれるべきである。つまり社会生活で人間が個人として生存しふるまうばあい、二つの性格をもつのである。この点があまり明らかに知られていないために、多くの誤解と混乱が生まれたのではないかと思う。ここでこの点を少し考えておこう。

文化生活における人間の活動は、その人の自発的な自由によってひきおこされ、学芸上の創造となるが、その成果の中には、その人の個性的、個人的特徴が客観化される。かれが生存と活動とにおいて制約を受ける社会的諸条件は当然にその成果にも制約を与えるけれども、その制約は、この場合には附随的な意味をもった影響として現われるのである。たとえば画家がえらぶ題材とか画かれる対象とかは、その画家の社会生活（狭義の）に制約され、したがってかれが属する社会集團の生活に関係のふかいものがえらび出されるけれども、その題材や対象において表現される造形の美、色彩の美は、その集團のもつ社会的意味を越えたところに現われるのであって、作品において

その画家の個性的な人格が見つけた美が、かれの技能によつて表現され、画布に定着しているのである。かれの社会生活が与える制約を無視して、いきなりかれの個性の表現としてかれの作品を考えることは抽象的な見解であつて、社会生活の、したがつて画家の属する階級なり民族なりが与える、制約はこれを十分に考慮しなければならぬといけれども、その制約の下にあつて、それを突き破つてゆく、画家の個性的な美の世界、そして個性的であるがゆゑに、また直接に普遍人間的なものにつながつてゆくところの普遍的な美の世界を、その人は創造するのである。

これに対して、狭義の社会生活で附随的な働きをする個人も固有の特色をそなえた個人である。しかしその個人は文化生活においてはたらく個性的な人格者ではなくて、集団を構成し、集団の意志に順応して行動するところの個人である。これを集團構成的個人といつてよい。

この二種の個人の存在を、最近、われわれに気づかせたのは、現在の駐日アメリカ大使、ライシャワー博士が大使を受諾した時に語つた言葉である。東洋学者としてのライシャワー博士と日本におけるアメリカ合衆国の公式の代表、外交官ライシャワー氏とは、同一の個人であつても違つた人格であることが、その言葉に盛られていた。学徒ライシャワー氏と政治家ライシャワー氏とのちがいはきわ立つたものであるが、こういう意味での二重性は、そのほかさまざまなニュアンスにおいて存在する。たとえば学徒ライシャワー氏にしても、ハーヴァード大学教授ライシャワー氏においては、研究機関であり教育機関であるハーヴァード大学のスタッフという集団の制約を受け、更に燕京研究所長としての氏は更に大きな制約を受けて、活動するであらう。だから、集團構成的個人といつても、その人がその集団において占める地位によつて、その人の集團代表性は多種多様であるといふはかはない。ある労働者は潜在的に學術への能力をそなえた個性的個人であるとともに、かれの職場で労働組合の一員であり、その意

味でその労働組合の意思にしたがって行動するけれども、かれが普通の組合員であるばあいと役職をもつばあいとは、かれの集団代表性に相違があるのである。またその個人がいくつもの集団——家族・労働組合・地域団体・階級・民族など——に属している点からいえば——集団構成的個人そのものも実は重層的にあい重なっている。この事態を集団構成的個人の多様性と呼ぶことができるだろう<sup>2)</sup>。

以上の意味において、狭義の社会生活における人間のあり方と働らき方は、文化生活におけるそれらと異なったものなのである。この相違を抽象的に特徴づけると、つぎのようにいえよう。文化生活では個性的個人が第一次的に重要な役割を演じ、かれの個性によってとらえられた現実の眞実をばある形式において表現することによって、人類全体にたいして文化的に有意義な創作となりうるのであるから、これを論理的にいうと、個人の仕事が直接に普遍人間的なものに通ずる価値をもつものとして現われる。ここでは人間における個別的なものと普遍的なものがあるものであり、且つそれらが一つのものに結びついているから、個性すなわち普遍性という事態が実現しているといえる。これに反して、社会生活においては、第一次的に重要な人間のあり方と働らき方が集団であり、その集団の中には小は家族から大は人種までの各種の範囲のものが、すなわち、個人に隣りする集団から人類にいたる直前の集団にいたるものまでが重なっているのである。この諸集団は、論理的にいえば個性性と普遍性との中間、つまり特殊性を具えたものである。われわれは社会科学の対象界は、こういう意味で、特に特殊性の世界だといえることに、十分な注意をしておかなければならない<sup>3)</sup>。

## 註(1)

社会科学のな見方を文化についておこなうことが流行りだして以来、人文科学における個人の意義が強調されると、すぐにブルジョア的だと、それを批判することが多かった。文化生活と社会生活とのつながりを無視して、文化主義の立場で人文



科学を考えようとするかぎり、この批判は当たっているのだが、文化創造者をつねに階級のカイライにみ立てて満足しているような幼稚な思想ならばともかく、文化の深い理解に達しようとする人には、これは文化の周辺を堂々めぐりしているだけでついに文化の本質には突き入ることができないことが、わかるはずである。周辺から内実にはいろうとすれば、文化創造者としての個人の個性的人格が創造的に活動していることをみ出すであらう。その人格は、社会生活の諸条件に制約を受けながら、それらを自分の個性の発展のために利用しつつ、文化をつくり出したのである。

- (2) わたしが個人の持つ二重性に気づかしめられたのは、先年、天野貞祐文部大臣が道徳実践要綱を発表して物議をかもしたときであった。天野氏はその要綱が天野勅語とでもいうべきもので、古い道徳教育への逆行になると批判されたとき、弁明の辞として、その要綱は天野貞祐個人ではなくて、文部大臣としての天野個人の作品であり、その資格で発表したと、のべた。そのばあい、天野氏は道徳実践要綱が一倫理学者としての意見としてとられることを好まず、かといって、文部省全体の意見であると考えられることをも嫌ったが、しかし一方では權威のある倫理学者として、他方ではわが国の文教を司どる最高の責任者としてのことばの重みをその中から汲みとられることを期待したにちがいない。すなわち、文部省の權威の失墜には、天野貞祐氏が責任をとることが言明されようとしたのである。(適当な例でないかも知れないが、敗戦に際して軍部の代表者たちの中から出た自殺者の心境もこれに近い。)わたしは集団が個人によって担われるということの中に、集団における個人が、個性的な人格者としての個人とはちがっていることを、この事件から思わせられた。そして上のような思想に到達した。なお一言しておく、個々の個人は集団代表性をいろいろの程度においてもっている。その程度はその個人の個性の一部となる。そしてその程度がその個人の社会的資質——狭義の社会生活への適格性——を決定しているのである。社会的資格とは集団意識と社交性と責任感覚とから成るといつてよいであらう。

ディルタイの精神科学論における個人の取り扱われ方について教言をつけ加えて、私見のあるところを明らかにしておきたい。ディルタイの考えでは、人間に関する科学が精神科学の基底をなすのだが、その基底において個人はまたもつとも中心的な地位をしめている。個人と集団との関係は、個人の意識の上で、集団の意識が重層的にかさなり合うというところに成り立つ。個人の意識はつねに集団の意識が現われる場であり、その場を離れては、集団の意識は存在しない。個人の意識の場が「交差点」 Kreuzungspunkt と叫ばれる所以である。しかしこう考えるディルタイでは、個人の意識を交差点と叫ぶ

- ことによつて、個人から独立な存在と活動とをもつ集團のあり方に十分には捉えられないと思うのである。個人の意識の場において現われることもあるが、あるばあいには、個人には意識されることなくしても、集團の意志が表現されることもあるということが、十分には把握できないと思われる。デイルタイでは、文化生活における個人と集團における個人とが区別されず、前者において普遍的な人間性が見られ、その意識の上に、集團的なものが宿るとされるにとどまるからである。交差点となる個人は文化生活における個性的個人にほかならぬ。そしてこのことのために、集團はその独立性を失なうにいたるのである。——デイルタイの思想は個性的個人と集團構成的個人とを区別することをしていない。むしろ個性的個人をそのままで狭義の社会生活にもみているのである。だからかれの精神科学には、人文科学と社会科学との区別ができないのである。
- (3) 社会科学が特殊性の世界だといふのとくらべると、自然科学は普遍性の世界であり、人文科学は個別性の世界である。新カント学派の科学認識論において、自然科学が「普遍化的科学」、文化科学——これは人文科学のことである——が「個別的科学的科学」といわれ、社会科学が両者の中間領域にあるとされたことを思い出されたい。

#### 四 社会科学と集團

上にのべてきた集團について更に立ち入った考察をすすめてみよう。論理的に特殊性を特徴とする社会における各種の集團には、一般的にどのような特質がみられるであらうか。

第一、集團の生活内容には、個人のばあいよりも、人間の空間的および時間的限定が一層強度にあらわれる。

一般に人間の存在と働らき方には空間的な限定と時間的限定とが本質必然的なものであるけれども、個人のばあいと集團のばあいとは、この限定のされ方に差があるのである。まず空間的限定について考えると、集團そのものにはある空間的な広がりにおいて存在し、その空間と結びついてのみその集團の特色を発揮する。だからその空間から離れることは容易ではなく、たとえ離れられるとしても、そのときその集團はその性格の内の何かを失なうか、

それまでになかった性格を、新しい空間に制約されて受けとらざるをえないからである。ユダヤ民族のエジプトから脱出のような場合がそれである。またディアスポラの状態にあつたユダヤ民族の生活がそうであつたろう。家族の移住はある程度に容易であるが、ふるさとから離れた家族は新しい土地で以前の特徴を失ない、別にあたらしいものをつけ加えるであらう。実際に、家族の移住は古きをすて新しきを求めて行なわれるばあいが多いのである。集団構成的個人のばあいも同様のことがいえる。「人間は社会においてのみ自己を個別化しうるものだ」とマルクスは『ドイツ・イデオロギー』の中でいつているが、わたしはここにいる人間は狭義の社会生活における人間を主に考えていると解釈したい<sup>1)</sup>。ところがそれとは反対に、個性的個人のばあいには、空間的限定の制約はもとより大きいけれども、かれはその制約から解放されてコスモポリタンとしての生活が困難ではなく、未知の土地で文化的創造にたずさわつて成功を収めることができる<sup>2)</sup>。つぎに時間的限定についてみても、集団は徹頭徹尾、歴史性にまといつかれてゐることがわかるだらう。第一、集団の種類の登場や退場は歴史的事である。市民社会や階級は近代以後の産物であり、家父長的な家族は近世になると姿を没することが正常である。第二に集団の構成員は集団のもつ歴史性を全面的に身につけている。たとえば、ボムベイにいま見られるミイラは、それらを一九〇〇年以前のこの町の市民としてみると、人口約二万の市民のうち、ミイラとなつて現存している者として、われわれの感慨を呼ぶが、かれらの社会生活に関心を寄せてゐるばあいには、その人たちの名が不明だとしても、それでよいわけである。市民集団の構成員と考えるだけでよいのだ。だが当時有名な文化人がその町にいたとし、一つのミイラがその人であることが他の事情から判明したとすると、そのミイラには独特の興味がつながれるであらう。前のばあいには、ミイラを測定しても、それは一世紀に住んだローマ人の一人として、標本をつくる目的から行なわれるの

であろうが、後のばあいには、個性的な文化人なにしたがひの身体を復元するという個別的な関心がよこたわる。わが国の例でいえば、それは平泉の金色堂に遺る藤原三代のミイラに対する関心と同じものであらう。この関心は歴史的な制約を受けてはいるが、同時にそれを越えて、他の時代の個性的個人と並立する個人にたいするものであつて、そのミイラは歴史的で同時に超歴史的なのである。これに反して、前のばあいには、徹頭徹尾歴史的な制約を受けた人間の姿が見られている。

第二に、社会科学では人文科学と同じように、人間の生活の一部局が問題とされるのだから、人格の拡がりを全体としてそこで明らかにすることはできず、その部分像だけがとらえられるのである。これを説明することは困難ではない。すべて科学は固有の問題をそれに応じた視角から問うのであるから、生活の全部局を問題としえないで、いわゆる科学のアプリオリによって規定された部局だけに焦点をあてる。だから経済学では経済生活の主体としての人格だけが問われるのであつて、その他の人格の部分は他の諸科学の成果を待たずしては明らかにならない。

ところで、個々の社会科学は上の意味での人格をその深さの全体として把握することはできないものであつて、人格のある深さの断面を明らかにすることができるだけである。

このことを説明するためには、二段のかまえが必要である。第一は、社会科学と人文科学の双方を通じて、人格の全体は明らかにされえないものだという注意。第二には、その中でも、社会科学は固有の限界の中においてでなければ人格を解明しえないという注意。——この二段の説明が必要である。まず第一の注意からいうと、わたしは現実には一つのものであるわれわれの生活を、文化生活と狹義の社会生活とに分けたが、そのことによって、生活

の全体は、そのどちらの中にもないことになる。したがって、双方の中で表現される人格の多様性は、どちらの一方においても、把握することはできない。狭義の社会生活を科学的に解明しようとするれば、文化生活において生き甲斐をみいだす人格の側面は無視されてしまい、文化生活に注意を向けると、その人格の社会生活は焦点の周辺で漠然とする。残念ではあるが、これが科学的考察の限界なのであるから、止むをえない。第二に、その限界の内部において、社会科学にはさらに固有の制限がある。それは人間が集団として扱われるがために、人格が集団的なものに限定せられるのである。つまり集団を構成する人間の類型的な人格のみがみられて、個々の個人の人格の微妙な深所にまでは入ることが不要と考えられるのである。たとえば資本家の人格は経済学では「経済人」としてとらえられるであって、個々の資本家の経済人らしからぬ資質はそこでは問われることを要しない。かようにして、社会科学では二重に制限された人格が問題となり、その人格の断面が浮かび上がるのである。

以上のように、人間に関する考察に問題を限っても、社会科学には、固有の制限が本質的であることがわかる。とするならば、人間をその全体的な拡がりと深まりとにおいて把握することは、どうして可能なのであろうか。最後にこのことに一言せねばならない。

わたしの答えはある意味では陳腐である。人間にかぎっても、その全体を把握するのはひとつの科学において可能ではない。それが可能なのは人文諸科学と社会諸科学の成果の総合においてである。その場合、その総合がどうして可能なのかについて困難がおこる。両つの科学がそれぞれの成果を同じ程度に打ち出しているとは保証されないからであり、またたとえその事態が現われているとしても、それを総合するという仕事は、科学が進歩するにし

たがって、かえってますます困難になるであらうからである。実際には、一方ではその綜合につとめながら、諸科学の成果を受け入れる思想的地盤ができていることが必要であって、その地盤となるのは、科学をこえる形而上学——社会や歴史の形而上学——にほかならぬ。一言でいえば、それは、歴史、哲学にほかならないのである。

(1) 誤解のないために一言する。わたしはマルクスの言葉をかように解釈するからといって、文化生活を狭義の社会生活から切りはなして考えようとするのではない。二つの生活部門は密接に關係し合っており、その限りで、文化生活は社会生活から大きな制約をこうむってはいるのだが、徹頭徹尾その制約の中にいるのではなく、その中にありながらそれからはなれた境、地で文化的創造にたずさわるというのである。

(2) ヨーロッパやアメリカの人たちの国々のあいだである国から外国に移住した人が、その国の政界で活躍することは容易ではないだろうが、有能な文化人が移住して学問や芸術の仕事をする、間もなく新しい土地で盛名を得ることができ、ナチスに追われてアメリカに移住した人たちに、その例は多いはずである。経済活動もまた移住者の活躍の困難な領域であるが、その内、比較的容易なのは、流通部門における活躍とサービス部門のそれとである。ユダヤ人の商業、金融業、中国人の料理業、理髪業、洗濯業などがそうである。これらの事實は、正常な経済生活とその空間的限定との密接な關係について反省することを、求めているであらう。ところで、個性的個人が空間的限定から自由になって、コスモポリタンとして生活しようということとは、いわゆる実存的存在を意味している。個人は単独者としても生きるのである。実存主義の思想は、人間のこのような状況——これはたしかに限界状況である——を一般化するところに成り立つが、個性的個人のとりうる態度を波及した点で人間の本質の一部にふれているといつてよい。けれども実存だけから人間の全体をつかむことができないように考えるのは、狭義の社会性を軽視するあやまりを犯している。社会科学に実存主義をもちこむのは、その限りでは誤りであって、それは、限界状況あるいは異常な状態にだけ、意味をもつ。社会科学においても、われわれはまず正常な状態について思索をすすめる、異常な状態はそれを部分的に修正するために考え加えるべきものである。

## 五 結 語

わたしは、人間の取りあつかい方に中心をすえて述べてきた、以上の考えから、最初に提出した、吉川英治氏の疑惑と不信とにこたえよう。

吉川英治氏の意見は、わが国の生活最も広く読書層の生活意識を、したがって現代日本人の広い層の常識を代表しているといつてよいであろうが、わたしの答えはこうである。社会科学は、それに固有な前提のために、人間を全体として把握することはできないのである。まず生活の内容からいって、社会科学一般の対象となるのは狭義の社会生活であつて、文化生活の局面は他の科学の対象領域である。のみならず、その狭義の社会生活についても、それを一括してとり上げるものではなく、固有の行動とその行為を中心に取りむすばれる人間の関係およびその間から創造される物や制度について、法則的な秩序と発展の方向とを認識しようとするのである。また、その対象領域の中にあつて働らく人格についても、その全貌が個別的な社会科学の中でとりあつかわれるのではなく、その部分的な表出だけである。社会科学はこの二つの意味において、吉川氏がいわれるとおり「人間をズタズタにしている」のであつて、その必然性をこそわれわれは理解しなくてはならない。そしてこの科学にたいして、早急に「人間のうちにある真如の肌」が解明されることを期待することの方が、常識の短見にもとづく誤りなのである。もっとも社会科学は「人間をズタズタにして」その仕事を終つたと考えているのではない。また考えるべきではない。社会科学と人文科学との成果の綜合によつて人間の「真如の肌」を近づけようとするのではあるが、その際には、一方では科学の成果の根拠づよい摂取とその綜合の努力とのほかに、歴史哲学の透徹したまなことがなくてはならず、こ

れまた早急なメタフィジックで以て人事を割り切るの愚を犯してはならない。第三に、社会科学者は、その専門領域における科学的達成に鼓舞せられて、専門家氣質を旺盛にし、職業的利己主義にも誘惑されて、他の領域にも自分の研究成果を押し売りし、性急で独断的な全体的結論に到達しようとしたくなるものであるが、このような抽象的な態度に陥らぬように、十分な自戒が必要である。

これが吉川英治氏の疑惑と不信とにたいするわたしの答えである。

# 追記。

本稿では、取り上げるべくしてはたしていない問題ももとより多い。ここでその内の一点だけについて、わたくしの考えの方向をしめしておこうと思う。それは現代の思想界の流行のテーマである疎外論である。わたしは、人間の疎外についても、それを一律にとりあつかうことをさけ、文化生活における疎外と狭義の社会生活における疎外とを分けて考えることが、問題を更にはっきりさせるに役立つであろうと思っている。